

## 対話について論じることの苦闘

鯨坂 恒夫

困った。過去4年、「教養の森」年報に寄稿してきた。どの年のテーマ（教養、FD、地域未来学、教養教育）にも、それなりにさらっと構想が浮かんだ。が、今年のテーマは「対話」、これには、はたと困った。この活動というか現象というか、概念というか、そのどこを掴んでどう引っ張り回せばいいのか、皆目見当がつかない。あまりに普遍的と思えるのか、それでいてコミュニケーションというよりは対話のほうがうんと限定的で、何か特定の価値ある結果が最初から織り込み済みの仕業のようにも思えるが、どうにも対話ということの属性がベクトル化できない。こんな言葉は、他に類例をみないほどめずらしいのではない。例えば、思考について論ぜよ、といわれても、こんなには困らない。

困ったときの神頼みは今やネット頼み、ちらっとググって（NHK的には放送禁止用語、Googleの宣伝になっています）みると、出てきました、マルティン・ブーバー。その思想は「対話の哲学」といって、ユダヤ教の教義を哲学的に洗練したものであるらしい。詳しく勉強したわけでは全くないが、筆者にとってこの人名は初見ではなく、以前なにかの文献（出典の記録がない）から興味をもって引き写したメモが残っている。「対話的原理」と称され、A・B2つの生身が対話する状況には、6つの仮象があるというものである。Bにとってそう見えるA、Aにとってそう見えるB、Bに対してそう見せかけたいA、Aに対してそう見せかけたいB、自分自身にとってそう見えるAとB、以上6つ。まあ、2人いるから6つなのであって、認識対象種別としては3つである。

自分自身にとってそう見える自分と、他者にとってそう見える自分が違うということは、そういわれれば当然でしょうと思いつつ、あらゆる瞬間にそれを意識しているかという、むしろ対話が白熱してきた折など、忘れてしまっていそう。ふだんも常に意識しているわけではない。この二つが違う原因を、自他のものの見方の自然な違いに帰しておけばいいものを、他者に対してそう見せかけたい自分がある、とわざわざ指摘されると、それもたしかにありえますね、と受け入れることはできる。いずれにせよ、われわれの存在とは他者の目に映るわれわれの姿以外にはない（と、サルトルだけがとくにそう言ったのか、他の誰かも言っているのか、ゴフマンのドラマツルギーはその詳細解析法といえるのか、知りません）と主張されれば、認識論的には確かにそうだと積極的に賛同する。た

だし、「見せかけ」ということについては、けっこう個人差のあることにちがいない。演技や隠蔽といった見せかけの度合いの強い人と弱い人がいて、強い人は日常にご苦労が多くてしんどいのではなかろうかと心配したくなる。と、涼しい顔をしていると、「ふりをしていないふりをする」(フロイトとレイン)、あるいは、あるがままの自分である"はず"の役柄を演じる、といったパラドックスまがいの再帰的な叙述で畳みかけてこられて、そうですか、そんなに人間やっぱり、パフォーマンスなんですか、と追いつめられてしまう。

してみると、とくに、あるいは、たまたま「対話」というシニフィアン（記号的表現）で切り出されるシニフィエ（のクラス、この場合は、活動、振舞、現象、場面、情景、他の言い方があれば教えてほしいです）は、まさに舞台上で演じられる仕業のような気がしてきた。だとすると、対話には第三者・観察者・観客が必要である。それがなければ密談、さもなければ恋人の会話になってしまい、これは折衝術という別のジャンル（後者に対してそのラベリングをするのは一面的、ないし失礼かもしれませんが）になる。ここで、当初6つといていた仮象の数が爆発的に増加する。他者にとってそう見える自分が観察者の数（とその組み合わせの数）だけ増える。ひょっとすると、他者に対してそう見せかけたい自分も、異なる他者に対するごとに違うかもしれない。ただ、古代ギリシアのアゴラや、もしくはスコラ哲学の実践の場における討議（disputatio, quodlibetal）ならばいざ知らず、とくにここわれらが日本においては、頑としてもの言わぬ観察者が圧倒的に多い（現代本邦大学の講義における学生がそうです）ので、幸か不幸か組合せ爆発には至らないようで、それが日本の利得でもあり損失でもあるのだろう。互いに鏡をかざしあって夥しい数の虚像を生み出すのではなく、何も反射しない木でできた衝立で光線の錯綜を遮っている。

日本人というのは、どうも世界的に見て特異な存在なのかもしれない。かの有名な魏志倭人伝（正確にはえらく長い名称です:三国志魏書卷三十烏丸鮮卑東夷伝倭人条）より350年ぐらいい前のことを書いた漢書・地理志（紀元前100年頃のことを記述、編纂は紀元後80年頃）に、倭人が樂浪海中に有り、と史書初出であるらしいが、そこに（倭人を含む）東夷は「天性柔順」であって、他の三方とは異なると記されている。他の三方とは北狄・西戎・南蛮、いずれも東夷とともに中国の本拠（華夏、当時は前漢）から見て異邦の蛮族（ギリシアであればバルバロイ…訳の分からん言葉を話す者達→barbarian）であるが、なんと東夷だけは穏やかだというのだ。この時代よりさらに400年ほどさかのぼる孔子が、東夷に住みたい（欲居九夷）と言ったことはゆえあることだ、とまで書き足してい

る（Wikisource 中国版でアクセスできる原典で一瞬にして確認、便利な世の中になったものです）。こんな出自をもつほどに平和的な、あるいは日和見的な民族にあっては、「対話」は成立しないのかもしれない。

なぜなら、対話は往々にして論争的展開になるからだ。対話当事者が互いに、なるほど、たしかに、そうですね、と繰り返していたら、舞台として鑑賞に耐えるものにならない。うらやむほどにうまくいくばかりの恋愛ストーリーが、決して売れないのと同じだ。物語は波瀾万丈でなければならない、物語とはそういうものだが、平均的日常がそうだったらむしろ大変だ。普通は、なるほど、たしかに、楽しかったね、がよいのであって、これは、進展がなく退屈でつまらないと忌避すべきことではない。現代社会は「変わらなきゃ」という強迫が強すぎる。それを煽っているのは報道機関である（内田樹）。「今日は特筆すべき何ごともありませんでした」というのは、生活者にとっては実は幸福なことなのだが、「ニュース」を唯一の商品とするメディアには、加えて残念ながらけっこう多くの企業組織にとっても、絶対に受け入れることのできない禁句である。しかし、嵐は年に何度しか起こらないものであって、それ以外の日常は「不断の普段」（高垣好宏、といってももどなたもご存知ありますまい、筆者の小学校5,6年の担任教諭ですから）なのだ。今になって思えば、これは禅の公案である日々是好日とほぼ同義である。

7♦

このような平和主義・平等主義の精神は、日本の中でもとりわけ紀州に顕著である、という風評を聞く。和歌山弁には尊敬表現も謙讓表現も少ないらしい。みな一緒、連れもて行こら、共和制なのである。古代の紀氏の時代からしてそうであったというし、16世紀後半の紀伊は宗教共和国の集まり（高野山、粉河、根来、雑賀衆、熊野三山など）である、というイエズス会宣教師ルイス・フロイスの観測もある。和歌山人としては、これをことさら意識して活かすことを旨としてはいかがか。ただし、紀氏や織豊の時代と現代とでは、社会のありようが違う。コミュニティが液状化している（ジグムント・バウマン）、つまり人々の行動が定型的習慣として凝固する間もなく、その行動を励起した条件や状態が変わってしまうという。なんだ、やっぱり変わるのか、じっくり腰を落ち着けて、などと構えていると、モビリティに優れた者たち（それが最新のエリートらしい）に踏み潰されてしまうのか。いや、大衆は、一揆を起こす事情でもない限り、大挙して自ら無理な変わり方はするまい。変化に仕向けるのは、それが自身のレゾナードトルであるオーソリティに違いない。和歌山には、あえて「バスに乗らない」（cf. 「バスに乗り遅れるな」は日独伊三国同盟に向かう大政翼賛会の

煽り) コミュニティをつくる潜在力をもつ歴史的経緯がある。

困った。話をあっちへこっちへ飛ばしてはみたものの、オチが見つからない。やはり「対話」は鬼門であった。なぜこんなに対話ということを論じるのに苦勞するのだろうか。対話はきっとコミュニケーションの一形態であろう。コミュニケーションならば、対話に比べて、最近とみに千倍は頻繁に聞く言葉であり、またコミュニケーションには、能力・スキルがうしろについて語られることが相当に多い。しかし、対話能力とは、そういっておかしくはないが、あまり聞かない。対話は、通りすがりや出会いがしらではなく、前提として親密さが必要なのではないか。加えて、情報伝達と了解だけでは対話にはなりえず、ある発話とその応答が斜めに交わるような推移が求められる。このような微妙な経緯に一般的な解析を加えることはおろか、典型例を集めてパターン化することも難しそうだ。情報屋の筆者が攻めあぐねる理由はそのあたりにありそうだ。情報屋のしたいことは、トップダウンの構造化・抽象化を経た一般化、それが無理ならボトムアップの典型化・パターン化である。最近流行りのAIスピーカーで、(人間対機械の)ダイアログ設計をどうしようかという議論も、当然のごとくそういう姿勢ではじめているが、どうやらこれは難航必至かもしれないということが、本稿と格闘して気づいてしまったではないか。